

傷を負っているキリスト者

年間第19主日B年

キリスト教を知らない人が、キリスト者がどんな生活を送ろうとしているか話すのを聞いたら、そんなことはとても信じられない、と感じるに違いありません。なぜなら、キリスト者は人間の力を超える生活に呼ばれていると言えるからです。例えば、俳優になりたい人がいるとすれば、魅力を感じている俳優に倣い、作家になりたいなら、優れた作家を自分のモデルにするかもしれません。しかし、キリスト者は、自分の生き方のモデルを選ぶことはできないと知っています。と言うのは、全知・全能の神ご自身に選ばれて、神に倣って生きるように呼ばれているからです。目に見えない存在である神に倣って生きられるように、神ご自身が偉大なモデルを私たちにお与えになりました。それは、御父と同じ意味で神である神の子です。彼は、神であることに固執せず、自分を空しくして、ただ神に属する聖性だけを帯びて、一人の人間としてこの世界に現れたのです。そのモデルに倣って生きることが可能なのは、私たちが御父と御子によって送られる聖霊、御父と御子と同じ意味で神である聖霊が、私たちの心を住まいとされることによって、神のみ心に似たものにしてくださるからです。こうしてキリスト者は、自分の生活に神の生活を映し出し、み旨に従ってこの宇宙が変貌されるように、神と協力することができるのです。

キリスト者の召し出しの崇高さは、たとえて言うなら、ある共和国の大統領、あるいはある国の陛下であること以上の優れた荣誉が伴う、と言えるでしょう。そうした荣誉は単なる人間の權威によってではなく、神ご自身の權威によって与えられるからです。だとすれば、自分に与えられている品位を認めるキリスト者は、それこそ、傲慢になるのではないのでしょうか。実は、私が日本のある有名な作家と話す機会があって、キリスト者の召し出しのことを説明したところ、彼は率直に自分の考えを表明してくれました。彼は、私が説明したとおりのことだとすれば、それはとんでもない傲慢になると思ったのです。彼の素直な反応を見て、ある意味でその考え方は当たっていると思いました。例えば、一年間、だれよりも多くのゴールを決めたサッカーの選手がいるとします。彼は自分の成績にうぬぼれないのでしょうか？あるいは、知的に他の人より優れている人がいるとすれば、それほど頭の良くない人を軽蔑しないのでしょうか？このような単なる人間的な事柄においてさえ、そういうことになるとすれば、自分が受けとめていることを神からの使命と認識しているキリスト者は、傲慢に陥ることがないのでしょうか。確かにその可能性を認めざるを得ないでしょう。しかし、使命をお与えになった神ご自身が、そうした罠に陥らないように助けてくださいます。それと言うのは、キリスト者はへりくだるべき多くの傷を自分自身が負っている、と認めているからです。

今日の典礼の第一の朗読には、預言者エリヤのエピソードが語られています。彼は神からの使命を受けて、イスラエルの神のほかには、神が存在しないことを民に教えなければなりませんでしたが、エリヤの姿は惨めで哀れなものです。自分の命を神が取り去ってくださるようにと願っています。その哀れな姿は、キリスト者に多くのことを教えてくれます。まさに私たち自身、惨めさと弱さそのものだからです。神からの崇高な召し出しを受けた聖パウロのことを、私たちは知っています。その召し出しとそれに伴う恵みによって、自分が思いあがる誘惑を彼は暗示しています。ですから、彼の言葉で言えば、思いあがらないように、自分の身にサタンから送られた使いである、一つのトゲが与えられました。それは深く彼をへりくだらせたのです。また、私はロヨラの聖イグナチオのことを神の栄光の歌い手のように考えていましたが、最近読んだ彼の伝記は、これまでとは異なる観点で書かれていました。それは、彼が

生涯の間に11の傷を受けたというものです。確かに私たちは、聖パウロ、聖イグナチオのようなカリスマを受けてはいませんが、彼らと同様に、歴史において神のみ業と協力し、神の聖性を輝かせるように神から選ばれました。それには神からの栄誉が伴います。それを深く実感させていただけるとき、一方で微妙なうぬぼれへの誘惑も感じるでしょう。そこで、私たちの抱えている傷が、惨めな被造物に過ぎないことを思い出させてくれるのです。

私たちは皆、いろいろな種類の傷を負っています。身体の患い、疲れなどのような、なんらかの欠如を味わったことのない人はいないでしょう。それに私たちの感性は深い傷を負っています。不忍耐、不信頼、落胆、自己嫌悪などが引き起こす傷です。さらに私たちの罪深さと関連している傷もあります。不信仰によってひどい孤独を陥ることがあり、愛の欠如は、憎しみや攻撃性などをもたらし、希望がしっかりしていないために、障害物に出遭うと負けてしまいます。しかし、信仰の観点から考えると、それらの傷には深い役割があります。その傷の内に、それを癒してくださる神様を見いだすのです。それによって自分についての考えが変わっていきます。全面的に神に依存している弱い者であり、神からの助けがなければ、自分は存在しないばかりか、実をつけないぶどうの木のように、何の役にも立たず、滅びに至るしかない者になっているという真実に目覚め、その結果、自分についての真理、つまり、謙遜に導かれるのです。

確かに、キリスト者としての召し出しを生きるということは、人間の力を超えるものです。ナザレのイエスが御父から受けられたような力を必要とします。彼は神の子に属する誉れ、名声を求める代わりに、自分の弟子の前に跪き、十字架の死に至るまで仕える者となりました。キリスト者の生きる模範がそこにあります。その生活を可能にするご聖体を私たちに備えてくださいました。今日の朗読の中で預言者エリヤは、神の山に登れるように力をつける食べ物をいただきました。その食べ物は主のご聖体を暗示しています。それによって私たちは、キリスト者として生きる力をいただき、主の傷によって癒され、さらに私たちの傷も人の傷を癒す力をもっていることを悟るようになっていきます。

J.E. ペレス・バレラ S.J.